

西ウクライナ日本情報ポータルより加筆転載¹

¹ 現在休刊中。9月より全面改訂の上再開予定。

地球の躓き方 A GLOBE-STUMBLER

—斜眼でみたウクライナ人社会の理想と現実—

安成 智子
Tomoko ANARI

筆者略歴

2002年 関西大学文学部史学地理学科入学

2005年 飛び級で同大学大学院博士課程に進学

2007年 同大博士課程前期課程修了、後期課程進学

2008-2009年 ロータリー財団の親善奨学生としてリヴィウ大学歴史学研究所に留学

2011年 関西大学大学院文学研究科西洋史専攻博士課程後期課程単位取得退学

同年春、博論準備のため単身リヴィウに帰還するが、震災後、知人の勧めでリヴィウのアートコーポレーション「ズイガ」でボランティアとしてイベント企画に携わる

2012年 友人とともに西ウクライナ情報センターを主催

現在、リヴィウ市内で自閉症のオス猫と同居。ボランティアとして野良猫の保護にもあたっている。猫たちの餌代稼ぎのため、ガイド、通訳、教師、ウエイトレス、店員、家政婦、ベビーシッター等々の仕事に従事しつつ、インターネットポータルにコラム「A Globe STUMBLER 地球の躓き方」を執筆中。専門は東欧の近代史とサブカルチャーと猫。主な取材スキルはネットとビールと口喧嘩。コラムでは主に、女性のための柔らかなナショナリズム論と比較猫文化論を展開中。

EURO 三題噺 —サッカーを通して見たウクライナとその周辺—

I セクシュアリティと女とナショナル・ヒーロー —セックスシンボルとしてのシェウチェンコ—

2012年6月11日 ウクライナ・ナショナルチーム、ヨーロッパデビュー！

ウクライナがシェウチェンコの2ゴールでスウェーデンを破り、欧州選手権初勝利を飾った6月11日、西ウクライナの「文化的首都」を自負するリヴィウの中心地に程近い我が家の近辺では、朝方まで「スラーヴァ、ウクライーニ！（ラテン文字表記は Slava Ukraini! ウクライナ語表記は Слава Україні! 以下同）」「ヘローヤム、スラーヴァ！（Heroiam Slava!/ Героям Слава!）」の雄叫びがゆきかっていた。意味は前者が「ウクライナに栄光を！」で、後者が「英雄達に栄光を！」である。「栄光を！」というよりは、もうちょっと気軽に、「我らがウクライナに栄えあれ！」「英雄達を称えよ！」といった感じだろうか。誰かが「スラーヴァ、ウクライーニ！」と叫ぶと、別の誰かが「ヘローヤム、スラーヴァ！」と返す。友人同士で言い合っている場合もあれば、ちょっと酒の入ったサポーターが前から来た知らない人に向かって叫んでいる場合もある。この雄叫びは、そもそも OUN-UPA (OUN-УПА²) という大変ナショナリスティックな部隊の合言葉、掛け言葉なので、ロシアやロシアのユダヤ人口ビーとの関係が微妙な首都キエフや東部ウクライナでは従来あまり耳にすることはなかったのだが、今ではどこでも普通に聞けるらしい。

一方、我々のリヴィウでは、街の中心地にある「クリウカ」という UPA の塹壕を模した人気のレストラン・パブが来店時の合言葉としてこれを用いているので、広く膾炙している。ただし、「スラーヴァ、ウクライーニ！」「ヘローヤム、スラーヴァ！」の部分だけ聞くと平和な響きだが、この後には、「スラーヴァ、ナーツィー！（Slava natsii!/ Слава нації!）」「スメルチ、ヴォローハム Smert' voroham!/ Смерть ворогам!）」と続く。意味は、前者が「わが民族に栄光を！」、後者が「敵に死を！」だ。さすがにこれは平穩ではないので、いかにナショナリストの多い西ウクライナでも、そうしょっちゅう耳にすることはなく、酒の席以外では。

エキゾティカ対ナショナルヒーロー 「誰が何と言おうと、シェーヴァが一番！」

6月11日の深夜なら、「ヘローヤム、スラーヴァ！」と応える代わりに「シェウチェンコヴィ、スラーヴァ！（Shevchenkovi Slava!/ Шевченкові Слава!）」と応えれば、誰もがビール一杯くらいおごってくれたらう。意味は、「シェウチェンコに栄光を！」。

1976年生まれのアンドリー・シェウチェンコは既に35歳。先頃、ロンドン五輪のイギリス代表を外れたと

² UPA はウクライナ蜂起軍のことで、OUN ウクライナ民族組織の武装部隊にあたる。パルチザン的な活動を主とし、ウクライナの戦闘的ナショナリズムの象徴的な存在となったが、民族意識を覚醒させるための強烈な反ソ、反露、反ポーランド意識とドイツへの戦争協力、ユダヤ人への対応といった周辺民族のナショナリズムとの衝突が現在の国際関係にも禍根を残している。

報じられたイングランドのベッカムが 1975 年生まれだから、ほぼ同世代。日本の選手では中田英寿がベッカムと同じく 1975 年生まれ、中村俊輔や女子の澤穂希が 1978 年。他スポーツではタイガー・ウッズがやはり 1975 年、日本では野球の松井秀喜が 1974 年、イチローが 1973 年で、スキージャンプの船木、テニスの杉山愛、柔道の野村忠宏、谷(田村)亮子らがいずれも 1975 年。

よく、女性にとっては 30 歳から 35 歳がいろいろな意味で曲がり角だと言われるが、スポーツ選手も同様。ゴルフや野球のように技術や経験が物を言うスポーツならともかく、サッカーのように 45 分ハーフ動きづめの競技で、35 才を過ぎて第一線で活躍するのは並たいていのことではない。2 ゴールを放ったゲーム後のインタビューでシェーヴァが発した「今夜は 10 歳若返ったような気分だ」というセリフを聞いたときには、一緒に見ていたウクライナ人の友人より、私のほうが感動した。私のほうがシェーヴァに年が近いからでもあろうし、女のほうが年齢との戦いに同調できるからでもあろう。二十歳そこそこの友人のほうは、「今日はミレウスイキーが・・・」「フランス戦では・・・」と冷静に興奮していたが、私は 10 年前のシェーヴァのことを思い出していた。そして、10 年前のシェーヴァを日本で見ていた自分を。10 年後にこんなところでビールを飲みながらサッカーを見ているなんて、想像もしていなかった自分。長く第一線で活躍するスポーツ選手には、見る者にフラッシュバックを与える力があるような気がする。

言うまでもなく、翌日の紙面は「勝利」と「ゴール」と「シェーヴァ」の言葉であふれていたが、よく訪ねる情報サイトの一つ、Tochka.Net の女性版 Lady.Tochka には、シェーヴァを使ったちょっと変わった企画物がアップされていた。「EURO2012 セクシー対決 どっちがよりセクシー？ シェウチエンコとイブラヒモヴィッチ編」というものだ。これは連続企画で、シェウチエンコ対イブラヒモヴィッチ編のほかにも、ロシアのアルシャール・ヴィン対ポーランドのヴァシレフスキという因縁ある両国のキャプテン対決とか、対フランス戦を前にしたミレウスイキー(ウクライナ)対フランク・リベリー(フランス)のフォワード対決などが組まれ、読者が自由に投票できるようにになっているのだが、いくつかある対決の中で圧倒的に盛り上がっているのが、このシェウチエンコ対イブラヒモヴィッチ対決だった。

人気の両者で、しかも勝利の翌日にアップされたということが最大の理由であるには違いないが、他の対決がいまひとつ Lady.Tochka(女の観点)からすると面白みに欠けるのも一因のようだった。

例えば、ヴォロニン(ウクライナ)対ジェラルド(イングランド)といった渋い対決には、「どっちもセクシーじゃないし」、「セクシーっていうか、二人のぶ男なんですけど?」といった厳しいコメントが並んでいるし、ミレウスイキー対リベリーにも、「どっちもなし、以上」、「完全に愛国的観点からミレウスイキーってことで」といった冷めたコメントが続いている。女性専用サイトのコメントが手厳しいのは洋の東西を問わないようで、思わず 2 チャンネルの鬼女板や毒女板を思い出してしまうところだ。「セクシー対決」と銘打つ限りは、サッカー選手としての力量は関係ない、という断固とした姿勢も、いかにも現実的で女性らしい。特に、東欧の女性はこういった点、とてもシビアだ。

一方、シェウチエンコ対イブラヒモヴィッチ編のコメントだけは実に熱い。確かに、「セクシー対決」という点だけでも、そう銘打って許されるのはこの取り組みくらいだろうと私にも思えるし、二人がいろいろな意味で対照的なのも面白い。一般紙でも取り上げられていたように、D グループの初戦スウェーデン対ウクライナ戦にはイブラヒモヴィッチとシェウチエンコという AC ミランの新旧エース対決という側面があって、既に下り坂、というより、キャリアの最終コーナーにかかっているかつてのエースシェウチエンコと 30 歳とサッカー選手としては過渡期だが、男性としては今が盛りのイブラヒモヴィッチとの対比は確かにそれだけで絵になっている。しかも、ともに「西欧の外」に出自を持ちながら、両者のキャラクターは正反対、にもかかわらず、両者はともにある種の「セクシー」を代表している。使われている写真を見ても、イブラヒモヴィッチが試合中に走りながら咆哮をあげている野生的な姿なのに対して、シェウチエンコのものは静止画像で、口を噤んで一点を見つめているブロマイドのような写真だ。動のイブラと静のシェーヴァが上手く対比されている。

「対決」記事にも書かれているが、ウクライナ人にとってシェウチエンコは、「長い間、国の誇りであると共にセックスシンボル」だった。記事の言葉を借りると、彼は、「もうずっと前に結婚してる家族を持ったパパ

さんで、色んなクラブチームでプレーしてるにもかかわらず、ウクライナでの女性人気は衰える兆しはない」アイドル選手。一方のイブラヒモヴィッチは、アダルト系のビデオに出ているもおかしくないようなワイルドで男性的な風貌の持ち主。サッカーはナショナリズムを喚起する、といった重い価値観とは異質のオーラを持った選手だ。

改めて二人を紹介すると、ズラタン・イブラヒモヴィッチは1981年にスウェーデンのマルメで生まれている。夫人は11歳年上のスウェーデン人女性。息子が二人。スウェーデンナショナルチームのキャプテンだが、名前からも分かる通り、両親は共に南スラブ系の移民。190cmを超える長身に90キロ近い巨体、その巨体に10を超えるタトゥーを入れているのでも有名だ。全てが規格外で、言動も奔放、髪を振り乱して走る姿は古代の戦士のようなでもある。リオのカーニバルで腰をくねらせているグラマーなブラジル美女を「最高にセクシー」な女番付の横綱とする土俵なら、彼は「最高にセクシー」な男番付の横綱といって良いかもしれない。要するに、男性ホルモン満開の色気の持ち主だ。

「セクシー対決」でイブラヒモヴィッチに投票している声も、外見からあふれ出る色気を評価する声が多い。「ズラタン・イブラヒモヴィッチは宇宙一セクシーよ！まじ今風の外見よ。タトゥは全然マイナスなんかじゃないわ、むしろ反対、かっこよく見えるわよ。誰か他に、2メートル近い長身でロングで醜い大男に見えない人っている？いないわよ、イブラだけよ！ズラタン・イブラヒモヴィッチは最高にハンサムで最高にセクシーなサッカー選手よ！シェーヴァは・・・だめ、ああいう外見は私のタイプじゃないわ」「断つ然、ズラタン！あれこそ男性的なセックスアピールってものよ！」「ズラタンよ！とにかく、セクシー！」「絶対イブラよ！彼はとにかくクレージー、あらゆる意味でね」といったホットなコメントが続いている。

一方のシェウチエンコは、1976年にキエフ州の東の端ヤホティンの小村で生まれた35才。183cm、72キロは恵まれた体型ではあるが、ウクライナ人としても、サッカー選手としても、飛びぬけて大柄というわけではない。2004年にポーランド系のアメリカ人モデル、クリステン・パジックと結婚し、二人の息子をもうけている。夫人は第三子を妊娠中だ。ポルシェとアルマーニのファンとして知られるが、外見的にはごく普通で、私は彼を見ていると、目鼻立ち尋常な好男子、という古めかしい表現を思い出す。地味な格好をしていれば、その辺を歩いていても気づかれぬようなノーマルな風貌。彼の魅力は、この普通さにある気がする。

「シェーヴァ、あなたが最高！あなたはいつも私達の心の中にいるわ。他のどんな選手のこともあなたのことみたいに好きなことはないわ！あなたは私達のアイドルよ！あなたと比べられる人なんていないわ！あなたは世界的な人なんだもの！スーパースターよ！かけがいのない最最最高の人よ！ハンサムで頭が良くてチャミングでセクシーでかっこいい！愛してる！」

これがトップコメントである。ちなみに、煩雑なので省略しているが、たいていのコメントでは一文につき「！」が10個ほど、更にいくつかの文ではスマイリーを略した「）」が10個くらい並んでいる。

「シェーヴァチカ、あなたが最高！あなたのこと尊敬してるわ！とつてもハンサムでセクシーで、あなたは私達の誇りよ！こんなイブラヒモヴィッチなんて、あんな野蛮人、あんなのと並んで歩ける女の子なんていないわよ。中身も粗野だし、何よ、あの鼻？ふん。野蛮な田舎者、匂ってきそうな選手じゃない！シェーヴァはあいつをやっつけたわ！それも正々堂々と！2ゴールよ。素晴らしいわ、素敵なアンドリー、私達はいつもあなたと一緒によ！」

こうしたコメントには当然イブラヒモヴィッチのファンから反論が出てくる。

「言うまでもなくイブラよ！問題は、多くの人々がシェウチエンコはウクライナチームだからというだけの理由で彼に投票していることだわ。シェウチエンコは素晴らしい選手だし、仕事においてはプロよ。でも今はセクシーさの話をしてるのよ。イブラの外見は別格よ。完璧なボディ、最高の美女でも平静で入れなくなるような誘惑的な眼差し。そりゃシェウチエンコもハンサムよ。でも、彼にはズラタンが持っているような色気はないわ」

しかし、そういわれても、シェーヴァファンはひるまない。

「勿論セクシーさの話をしてるのよ。あなた、人の好みは好き好きってこと分からないのかしら？私にとっては、そうね、例えば、イブラヒモヴィッチなんて輩は単に吐き気を催す対象だつてこと」

「イブラよ、勿論！シェーヴァ、シェーヴァって言うてる人はみんな客観的に見てみるべきよ、自分達の選

手に投票するんじゃないくて！イブラの方が若くて、セクシーで、何よりミステリアスじゃない！」

というコメントには、

「何、それ？『自分達の選手に投票してる』って、何言ってんの？自分達の選手じゃなくて、よりハンサムでセクシーな方に投票してるのよ。で、実際それがシェーヴァなの。ズラタンにはセクシーさなんてないわ！野蛮で不潔なタイプだし、彼のサッカーだって全然お粗末よ。シェーヴァは彼をやっつけたわよ！偉いわ、シェーヴァ！彼はこれまでもずっと最高だったし、今も、それにこれからもずっと最っ高なのよ！」

と返す。熱くなっている割には、双方そこそ論理的で、かつ譲らないのがウクライナ人らしい。

イブラ派は、彼の際立った長身や派手な顔立ちといった人目を引く外見と、エキゾチックでエキセントリックな言動を、一般の選手にはない強烈な「セクシュアリティ」だと主張し、ハリウッ드의俳優にも劣らないようなセックスアピールの塊と、もはや盛りの過ぎた 35 才のおじさんを比べて後者の方をセクシーだと言うなんて身びいき以外のなんでもない、と言っているのだ。

それに対し、シェーヴァ派は、彼が自分達のためにしてくれたことに感謝していることは認めつつ、たとえ彼が「自分達」の選手でなくても、彼の方が自分にとってはセクシーなんだと主張する。逆に、たとえイブラが「自分達」の選手であっても、彼はタイプじゃない、ということを含め蓋もない言葉で付け加えながら。

彼らが一番言いたいのは、セックスアピールというものは性ホルモンとイコールではない、ということのようだ。全ての男が巨大なおっぱいに最高のセクシーを感じるのではないように、全ての女がワイルドで男臭い外見に最高のセクシーを感じるのではない、肉体的な衰えを気にしながらも周囲を気遣い、身だしなみに気を配り、礼儀正しく振舞う知性と Gentle-ness にこそ大人の色気は宿るのだ、というところだろうか。

シェウチェンコに投票している女性達のコメントはたいてい文章が長く、情緒的で、かつ愛国的だ。そしてそれらの特徴からしても、多くが写真やプロフィールをつけずにゲストとして発言していることから、恐らく、イブラヒモヴィッチに投票している女性達より年長だと思われる。シェーヴァは外見もセクシーよ、でも彼の内面からは成熟した大人にしかない色気を感じるのよ、若けりゃ良いってもんじゃないの、という彼らの強い主張の裏には、女だってそうなのよ、という隠れた主張があるのかもしれない。

仄かに香るセミティズム

ところで、シェーヴァのファンに「何よ、あの鼻」と言われているイブラヒモヴィッチの「鼻」とは、彼の巨大な驚鼻のことである。その鼻とイブラヒモヴィッチという姓、それにエキゾチックな風貌と過剰なセックスアピールのおかげで、彼には以前からユダヤ人、ムスリムの噂がある。イブラヒムはイスラエルの民の祖とされるアブラハムのコーラン中における呼び名で、ヴィッチというのはスラブ諸語で父称を形成する語尾。したがって、イブラヒモヴィッチというと、イブラヒム、つまりアブラハムの息子という意味をもつ、と解釈できるからだ。Facebook には「Zlatan Ibrahimovic - the Undercover Jew (隠れユダ:ズラタン・イブラヒモヴィッチ)」というページまであるし、英米版の Yahoo クエスチョンには「イブラヒモヴィッチはユダヤ人なんですか？」といった質問がいくつか残っている。この種の噂の元は大抵鼻と名前とエキゾチックなセックスアピールだ。日本のネット住民が、釣り目と頬骨と名前から、次々と有名人を朝鮮半島出自の人と認定していくのと似ている。

日本のネットによる半島人の認定同様、真偽のほどは定かではないし、そこには大して興味もないが、イブラの鼻と名前が容易に異教徒を想起させるということを念頭において、「ナショナル・ヒーロー」シェーヴァを称揚するコメントを見直してみると、「野蛮」「臭そう」「気持ち悪い」といった、シェーヴァのナショナルな尋常さ対比するために用いられたイブラへの形容の中に、かすかなアンチセミティズムとゼノフォビアを感じ取れることも可能だ。

私はリヴィウという変わった町で日本人をしているため、日本や他の国からきた人々から、どういふところなんですか、と聞かれることが多い。特に多いのが、ユダヤ人に対する見方はどうなんですか、というものだ。ウクライナはかつてポグロムを起こした国、そしてリヴィウはそうした苦い過去も全て包含した「民族の歴史」

を支持するナショナリストの町だからである。

しかし、外国人、特に留学生などが普通に人々と接している限り、ユダヤ人に対する蔑視などまず耳にすることはない。日本で普通に生活をしている外国人留学生が日本人の口から韓国人や中国人に対する蔑視について耳にすることがまずないのと一緒にだ。そうしたことは酔っているときか熱くなっているときにか現れないものだ。その点、ボール一つで人を酔わせ、熱くさせるサッカーの国際大会というのは、普段隠れているものを垣間見るチャンスといえるのかもしれない。

ついでに、タトゥーについて若干言及しておく、ウクライナのタトゥー事情は西欧よりもむしろ日本に近い。ウクライナ女性は華やかだし、若い世代のファッションに関して言えば、ウクライナは日本よりずっと自由な印象だが、年々増えてきているとはいえ、タトゥーはあくまでもサブカルチャー。若い世代は入れたがっても、たいていは親が反対する。顔やボディに目立つタトゥーを入れているのは、日本同様、アーティストやショウビズ系くらいで、それ以外は、入れるとしてもポイント程度のファッションタトゥーが殆ど。場所は手首、足首、うなじ等の、印象的で、かつ、たるんだり変化したりすることの少ない部分が主。ボディに大きな絵柄を入れたり、肘から先、膝から先の洋服を着ても隠せない部分に文様を入れたりするのはごく小数である。

タトゥーを入れたがるのは圧倒的に10代、20代で、30歳を過ぎて初めてタトゥーを入れるという人はごく少ない。だから、タトゥーアーティストも慎重で、ちゃんとしたところでは、10代に施術する際は保護者同伴を要請するなど気を配っている。これにはとても明快な理由が一つある。一度入れたタトゥーを除去するのは若いウクライナ人の収入ではまず不可能に近いのだ。タトゥーを入れるのは安価なのに比べ、レーザー除去は極めて高価だからだ。日本や西欧でもタトゥーが比較的安く、レーザーが比較的高いのは同様だが、収入に比した高さが違う。

数年前、ベルギーの18歳の女性が顔の半面に56個もの星のタトゥーを入れたものの、帰宅後父親に叱られ、外国人の彫師がフランス語を正しく理解しなかったために誤ってこんなにたくさん入れられたのだ、自分は三つの星を注文しただけだと主張して、タトゥーショップ相手に損害賠償訴訟を起こそうとする事件があった。ショップ側は徹頭徹尾この主張を否定し、最終的には女性も自分の主張が嘘であることを認め、訴訟も諦めたが、このときの店主は当初、自分たちには責任は全くないが、彼女が気の毒だから除去費用を半分持ってもいい、と発言していた。半分でも日本円にして100万はかかる。ウクライナのタトゥーアーティストにはそんな提案はできない。だから、こうしたいざこざを避けるためにも、ショップは慎重にならざるを得ないのだ。

そもそもウクライナは美容整形の普及率が欧米やアジア、南アメリカ諸国に比べて低い。リヴィウのような伝統的で経済指数の低い町は特に一般的でないで、町を闊歩している綺麗なお姉さんたちはほぼ100%天然モノだ。その代わり、衰えも早い。気候は厳しく、水が悪いのに、人々はとても表情が豊かなので、25歳を過ぎる頃から早くも皺が目立ってくる。そこから先はずっと加齢との戦いだ。しかも、ウクライナ人は決心が早く、見極めが良いため、結婚も早い代わりに、離婚率も高い。30歳を過ぎたあたりから、女手一つで子供を育てている女性が急激に増えてくる。

いつだったか、大家さんの奥さんと話をしていて、「ウクライナ女性は遅いですね、精神的にも、肉体的にも」と言ったところ、ごく当たり前のように、「ウクライナ女性は男なのよ」と言われたことがある。夫に見切りをつけ、年齢との戦いにも堂々と挑み、健気に遅く生きる女性達にとって、シエウチエンコは理想の男であると共に、理想の自分の投影でもあるのかもしれない。シエウチエンコに栄えあれ！ウクライナ女性を称えよ！スラーヴァ、ウクライニーニ！

II サッカーと歴史とナショナリティ —我らと我らの厄介な隣人達のナショナリズム—

ウクライナのサッカーと日本のサッカー

同日の先行試合イングランド対フランス戦が、イングランドの硬いサッカー対フランスの負けないサッカーという面白みのない古豪対決だったこともあって、35歳のシェーヴァが渾身の2ゴールを放って母国に欧州選手権の初勝利をもたらしたウクライナ対スウェーデン戦は、日本のサッカーファンにも好意的に受け入れられたようで、私としても実に嬉しかった。

日本語でウクライナの記事が読める滅多にない機会なので、あちこちのサイトでコメントを読んで回ったのだが、中にいくつか「ウクライナの個人技サッカーおもしろい！」というようなコメントがあって、思わず笑った。そう、何しろ、国家そのものが良くも悪しくも個人技の寄せ集めのような国だから、サッカーのナショナルチームも個人技の集大成。そして、だからこそ、良く制御されたチームサッカーを見慣れている者にとっては、異色で面白いのだろう。

ウクライナチームはウクライナの社会同様、気持ちが良いくらい、誰もが自分を大事にし、誰もが自分の良いところを発揮することを楽しんでいる。周囲もまた、誰かが誰かの良いところを発揮しているのを見て一緒に喜ぶ。これはスラブ人に共通した気質である。スラブ人というのは、本来とても Social な人々なのである。ただ、同じスラブ人でもロシアやポーランドといった政治的大国の場合、Political なイメージが先行して Social な人的素質を押しつぶしてしまっている。ちなみに、日本ではあまり教えられないが、ポーランドは中近世にかけて、ヨーロッパで一、二を争う大国で、共和制の伝統も古く、現在でも大変政治的な国民性を持っている。

ウクライナ人にはこうした政治的干渉がない。良くも悪しくも、ウクライナの政治はウクライナ人の上に影響を及ぼして、あるいは、及ぼせていないのである。ウクライナ国家は、大きく強く経済的に安定するには自由すぎるのだ。その代わりに、個人のサバイバル能力は高い。国家が不安定なことから、能力がなければ生き残れない。周囲、つまり家族や友人も、個人の能力を高めるために協力する。

一方、日本のナショナル・チームについては、語録で有名だったイビツァ・オシム元ナショナルチーム監督が、退任後に話していた言葉が印象に残っている。オシムは好きな選手を問われてジェフの監督時代から可愛がってきた教え子水野晃樹の名をあげたのだが、そのとき、「彼は日本人選手が持っていないものを持っていた。全ての場面でトライしてリスクも冒せていた」と言った。この言葉をひっくり返せば、日本人の、そして日本チームの特徴らしきものが浮かんでくる。行儀が良くてプレーもフェア、だけど、危険は冒せないし、意表をつくような挑戦も出来ない、ということだろうか。

ヨーロッパとサッカー

サッカーのナショナルチームの特徴は、国民性や民族的伝統、いわゆる「お国柄」といったものにしばしばたとえられる。

一番よく耳にするのが、サッカー王国ブラジルの「魅せるサッカー」と「魅せる国民性」の相似だろう。見せ場の作れないブラジルサッカーなんて、ボディにメリハリのないブラジル美女と同じくらいありえない。大阪弁で言うと、魅せてなんぼ、魅了してなんぼ。見るものを沸かせ、歓喜させ、楽しませてこそ努力した甲斐があるというのが、ブラジル流の生き方。たとえ地球最後のときが近づいていようとも、点を取ることで、華麗に点を取ることを考えるのが、ブラジルチーム。

その点、ヨーロッパのサッカーは総じてシブい。

ドイツはとにかく、勝つことが主眼。ドイツ人同様、泥臭くても、鈍重でも、とにかくどこまでも勝ちを追う。諦めることを良しとしない。PK に対するあの執念が何よりも雄弁にそれを物語っている。ゲームとは、勝負とは、努力した過程を見せ付けて、見せ付けて、それに見合った結果を勝ち取るもの、それ以上でもそれ以下でもない。それがドイツ人だ。

フランスのサッカーはフランス人の人生観と同じで、紆余曲折を想定している。そもそも、フランス社会そのままに、フィールドの外が常に騒がしい。政治、移民、差別、しかも、日本人と違って、フランス人はいかなる問題もおざなりにしない。徹底的に論じる。故意に悪童を演じるのも好きだ。だから当然、チームにもゲームにも浮き沈みがある。そういった外的条件が、駄目なときは駄目なりに、勝てないときはせめて負けないような、生き方、試合運びを生み出しているように見える。フランスのサッカーは大人の恋愛ゲームのようなサッカーで、フランス映画同様、好きな人は好きだが、嫌いな人はすぐに眠くなる。が、そうしたゲームを平気でこなせるのがフランスチーム。こなせなければ、フランス人にもフランスチームの一員にもなれない。言葉は悪いが、面の皮が厚くなくてはフランス人にはなれないのだ。

イングランドとイタリアのサッカーもそれぞれの国家の歴史的伝統を髣髴させる。

イングランドはゲームを作る。大会全体を見ている。サッカーの歴史の中で常に存在感を誇示している。ただし、肝心なときにかっこよく勝てないのがイングランド流。PK ははずす、はずす。特に、欧州選手権での弱さが印象的だ。

一方、イタリアの鉄壁の守りは、そのまま歴史と伝統に頼ったイタリア社会の反映だ。イギリスとは対照的に、およそ世紀がプラスに転じて以来、イタリアが政治的、経済的、社会的にヨーロッパ全体の役に立ったことなどまずない。それでも、ヨーロッパへの旅行者たちは必ずローマやフィレンツェやヴェネツィアに立ち寄る。イタリアがヨーロッパ最古の文化的遺産を連綿と継承しているからである。イタリアのサッカーを見ると、一見奔放に見えるイタリア人が、如何に情熱的かつ繊細に自由奔放な人間性を守ろうとしているかが覗いて興味深い。

そもそもいわゆる「古いヨーロッパ」のサッカーは、攻撃や攻守のバランスに個性があるものの、基本、守りだ。サッカーはそもそも守りのスポーツだからである。だからこそ、ナショナリズムを喚起するのだ。いかにつまらなくとも、点を取られなければ、負けることはない。国境が目に見えるところに迫り、常に他者のエゴと接して生きてきたヨーロッパ人にとって、領土を取られず、国家を失わなければ、負けではないのと一緒だ。

一方、「新しいヨーロッパ」にとって、国家もサッカーも守るものではなく、つくるもの。19 世紀までに民族としての伝統を有しながら 20 世紀をソ連の衛星国として過ごした西スラブやハンガリーにとっても、更にその先の、20 世紀末になってようやく独立国として認められたバルト諸国や南スラブ諸国、そしてウクライナにとっても、何より重要なのは、存在を主張すること。そのナショナリティは当たり前のように存在するものではなく、ある、と主張して初めて、ああ民族なのだ、と認識してもらえたものだ。サッカーも同様に、旧ユーゴスラヴィア出身のオシムが言うように、いかなる場面でもリスクを省みずトライして自らの存在を証明する。それが「新しいヨーロッパ」のサッカーの醍醐味といえるのではないか。

アメリカの「サッカー」

こうしてみると、守るべき伝統のないアメリカが長い間サッカーに背を向けてきたのが面白く感じられる。アメリカ人はヨーロッパ人が思っているほど馬鹿でも鈍感でもない。彼らは、こと「文化」や「伝統」に関しては、ヨーロッパ人がアメリカ製作の基準を受け入れないことを良く分かっている。ただ、アメリカはどうしても世界基準を作り続けねばならない。その二律背反こそが唯一無二のアメリカの伝統と言っても良いくらいだ。

結果、アメリカ人は、「若い国」アメリカの美德に馴染まないヨーロッパの伝統的サッカーを受け入れる代わりに、貧しいヨーロッパの少年たちには簡単に手の出せないような防御セットを要する格闘技にアメリカン・フットボールと名付けたり、狭く入り組んだヨーロッパの街路では練習のしようもないベースボールを国を挙げて愛好し、力任せにがんがん点を取って国民を酔わせたり、思いついたように、ベッカムにアメリカのフットボールを振興させようとしたりしてきた。

アメリカが利口だったのは、ソヴィエト・ロシアのように、他民族の歴史や文化的な伝統を塗り替えようとしなかったところだ。それをする代わりに、彼らはアメリカ人のためのアメリカ史を宇宙史並みに膨らませ、サブカルチャーを繁殖させ、拡散させる消費システムを確立した。ただ、サッカーのアメリカンリーグに関して言えば、アメリカ人が心からベッカムのフットボールに酔えるとは思わないのだが。

A グループの複雑な過去

EURO2012 のグループリーグは、A グループと C グループがポーランドで、B グループと D グループがウクライナでゲームを行った。もう少し詳しく言うと、A がポーランドのワルシャワとブローツラフ、C が同じくポーランドのポズナンとグダンスクで、一方ウクライナ側では、ウクライナの入っている D グループが首都キエフと東部のドネツィクで、そして私のいる「西の首都」リヴィウと「東の首都」ハリキウでは B グループの試合が行われた。

シエーヴァ最期の大舞台ということもあって、当然ながら国民の最大の関心はウクライナの入っている D グループにあって、リヴィウの街中にもちっちゃい国旗を靡かせた車が日を追うごとに増えていった。私自身も無論ウクライナの試合が何よりも気になっていたのだが、もうひとつ気にかかっていたのが A グループだった。そこには共催国であるポーランドがロシア、チェコ、ギリシアとともに割り振られていたからだ。

ギリシアはともかく、ポーランドとチェコといえば、かつてソ連を悩ませた「衛星国」の問題児だった西スラブ人の国家である。ポーランド人、チェコ人と言われてもぴんと来ないと言う人でも、ポーランドのレフ・ヴァウエンサ(年配の人にとってはワレサ)、チェコのヴァーツラフ・ハヴェルの名は聞いたことがあるだろう。映画好きなら、本編をみたことはなくても、アンジェイ・ワイダの名くらいはどこかで耳にしたことがあるだろうし、本好きなら、本屋や図書館の一角でミラン・クンデラの翻訳本を目にしたことがあるはずだ。歴史、文化、民主政治、いずれにおいてもロシアなんかより先進国だったという自負がある西スラブのインテリは、新しい歴史、新しい文化、そして共産主義という名の独裁制に基づいた奇抜な民主政治を浸透させようとしていたソ連人にとって目の上のたんこぶだった。

西洋人にとっての世界の歴史とは、「世界文化の中心地」が西から東に流れていく過程をいう。古典期にギリシアとローマで生まれた「世界文化」のエッセンスは、ポルトガル、スペインの繁栄を経て、フランス、イギリス、ドイツといったいわゆる「古いヨーロッパ」で近代的に開花していく。これが紀元前から 19 世紀までの西洋史、すなわち当時の西洋人にとっての「世界文化史」の大きな流れであり、日本で学ぶ「世界史」もこの流れに沿っている。

この後、ドイツより更に東方のロシアと、海の向こうのアメリカが 20 世紀の「欧米」の命運を握ることになるのだが、19 世紀までのヨーロッパ文化の形成において中心的な役割を演じた国家以外の民族は、国家としてヨーロッパに参加しようとするとき、自分達がいかに Occident、つまり「西」の一部だったかということに気かけずにはいられない。この「西」に対するある種の遠慮と対になっているのが、「東」に対する無意識の優越感である。それは、東洋に対する西洋、東欧に対する西欧の姿勢に顕著だが、さりげなく頑として根付いているのが、東スラブに対する西スラブのそれである。

ソ連時代に流布したアネクドットにこういうのがある。

ポーランド人とチェコ人の政治家がひそひそ声で会話している。

チェコ人「今度わが国にも海軍省を作ろうと思うんだが、これまでなかったからやり方がわからない。アドバイスをくれないか？」

ポーランド人「アドバイスを与えるのは良いが、チェコには海がないのに、どうして海軍省がいるんだ？」

チェコ人「いや、欲しいだけさ。構わないだろう？ロシアにだって文化省があるんだから」

更に付け加えれば、この「西スラブの優越」に乗っかって形成されているのが、「西ウクライナの厄介なプライド」である。日本では、『ガリツアのユダヤ人』を著された野村真理氏が、同書の中で「リヴィウ人の奇妙な優越」について、端的でシニカルな言及を加えておられるので、その部分を拝借して説明させていただきたい。

「一九九三年のガリツア旅行中、リヴィウ(ルヴフ)で聞いた演説は、今も私の脳裏に残っている。『ペレストロイカのための人民運動』(通称『ルフ』、ルフは運動の意)の本部で、ソ連時代末期にウクライナ独立の急先鋒を担った闘士は言った。「我々はもはやアジア的停滞の国[ロシア]には用はない。我々は、かつてヨーロッパの一員だった。我々は再びヨーロッパに復帰するのだ。』

同行の『ヨーロッパ人』の友人達は、『アジア人』の前であんなことを言うなんて、と私のことを気遣ったが、比ゆにアジア的停滞を持ち出すオリエンタリズム(?)はさておき、私には彼らの演説は奇妙に聞こえた。彼らの記憶の中で西ウクライナは、どのような意味でヨーロッパの一員なのだろうか？「西ウクライナ」というより、かつてのオーストリア帝国の一部としての「東ガリツア」が念頭にあるのか。それとも、ポーランドが三大帝国に分割支配された時代を除けば、数世紀にわたってポーランドの一部だった東ガリツアの事か。しかし、いずれの東ガリツアにおいても、ウクライナ人は政治的・経済的支配者でもなければ、指導的な文化の創造者でもなかった。」

「どのような意味でヨーロッパの一員なのか」という氏の問いに、サッカーに即して答えてみると、こんな感じになるだろうか。

「ウクライナは今回始めて UEFA(欧州選手権)に参加することになったが、ずっと昔からサッカーのルールは知っていたし、ソ連に吸収されるまでは独自のチームも持っていた。確かに、当時はまだゲームを支配するほどの力量はなかったが、西欧のチームと個別のマッチさえ行っていた。我々は、そういった歴史を通して、ヨーロッパのサッカーの楽しみ方を理解しているし、それを心得た上で我々の個性を生かしたチーム作りをしている。我々のチームはソ連チームを継承したロシアのそれとは別の土壌の上で育まれたものなのだ」。

だから、我々はロシアにサッカーを学ぶ必要など全くない、我々はロシアより根本的に「西」だ、ロシアは20世紀も終盤になってから政治力と経済力を利用してヨーロッパと接触し始めたが、我々は早くからそこにいたし、その空気の下で育ってきた、優勝できるようなチームではなかったが、我々はサッカーを愛するサッカー文化圏の一員なのだ、今はただ文化的にそこに帰還するだけである、と言いたいのである。

野村氏が書いているように、この種の優越感はナショナルでトラディショナルな人ほど身に着けているものだ。つい2週間ほど前、独立運動の戦士だったという60年配の男性と知り合った。公園でインタビュー中に向こうから声をかけられたのだ。キオスクでビールを買って振る舞い、即席のインタビューをさせてもらって、アドレスを交換する。別れ際、年齢の割に色気の濃いおじさんは、肩に手を回して小声でこう言った。「君は東洋人じゃないみたいだよ」。これは「彼らの」誉め言葉である。東洋人の女性が酒場で最も良く耳にする口説き文句の一つと言ってよいかと思う。もっとあからさまに、僕は東洋人は好きじゃない、でも君は東洋人らしくないから気に入った、と言われることもある。

しかし、優越感が目に見える形で誇示されれば、された側によって、侮蔑、批難の対象に反転されることもある。

UEFA が終わった日、現在言語法案を執筆中の地域党議員ヴァディム・コレスニチェンコはテレビ番組で、自分は、「リヴィウ・ハリツィナーで話されている方言はウクライナ語だと考えてはいない」と発言し、注目を浴びた。

「私は現在マスメディアをにぎわしているリヴィウ・ハリツィナーの方言には反対だ。私は我々に向かって差し出されているそれをウクライナ語だとは考えていない。あれは、かつて常に何らかの抑圧下にあったウクライナのあの地域の“げっぶ”みたいなもんだ」と彼はいう。

げっぶという表現も随分だが、ここで使われている抑圧(ウクライナ語の ΓHIT 、ロシア語では ΓHET)の下にあったという表現も明らかに意趣返しである。

抑圧、弾圧といった言葉は普通、ロシア史における「タタールのくびき」や、帝政ロシアにおけるウクライナ語に対する使用禁止政策のように、中央集権的な政権、いわゆる「アジア的」な専制政権が行った政治的圧力に対して用いられる。

野村氏の引用文中にある「アジア的停滞の国ロシアに用はない」という表現は、モンゴルの専制的中央集権制を受け継いだロシア帝国とソヴィエト連邦、そしてそのロシアからの政治的干渉に追従的なキエフを含む東部ウクライナに対して、「リヴィウは常に中東欧の文化に接してきた」、「ロシア化された東部と違い、ウクライナ文化、特にウクライナ語文化の守り手として尽くしてきた」という自負の現れでもある。

しかし、「中東欧の一部として、その文化に接していた」ということは、言い換えれば、中東欧の優勢文化の影響下にあった、ということにもなる。野村氏の言うように、リヴィウはいかなる意味でも中東欧の文化を率いてきたとはいえないからだ。コレスニチェンコのあからさまな嫌味は、リヴィウ・ハリツィナーの奇妙な優越感を逆手に取ったものなのである。

隣人達

A グループの最終戦、ロシアがギリシアにまさかのゼロ敗を喫して、ベストエイト進出を逃した。勝ち抜けたのは、ロシアに勝ったギリシアと、ポーランドを破ったチェコである。ロシアとポーランドという両隣が敗退したことに、どこかほっとしていた。

グループリーグが始まる前から、ロシアのファンの一部が暴徒化していると噂されていた。そして緒戦のポーランド戦、案の定、ロシアのフリーガン達は花火を打ち上げたり暴言を吐いたり、思う存分ポーランド人の鬨を聞くことに成功した。チームや戦術が語られる以前に、常にごく一部の Fanatic(狂信者)に振り回されて評判を落としているところが、何ともロシア的だと苦笑する。ロシア人を嫌いな奴なんかいない。やつらはみんな良い奴だ。陽気で親切で良い酒飲みだ。だが、ロシアという国を好きな奴もまずいない、あいつは何とも厄介でうんざりさせる国だ、という誰もが感じているロシアとロシア人に関する一大パラドクスが思い出される。不思議な、困ったお隣さんである。

一方、もう一つの隣国ポーランドに対しても、私なりに複雑な思いがある。ちょうど、ロシアとロシア人に対するパラドクスをひっくり返したような思いである。ポーランドは好きだ、しかし、個々のポーランド人というのは、リヴィウに住む日本人にとって些か厄介な友人だからである。ガイドとして町を案内するとき、一番口うるさいのがポーランド人だからだ。 どうして博物館にポーランド語の説明がないのか、どうして観光地のトイレがこんなに汚いのか、どうして広大な庭園を寂れたままにしておくのか、どうして民営化して活性しないのか等々。ウクライナ人には言わないようなことでも私には言ってくる。

ポーランドは親日国なので、日本のことを知っている人が、ウクライナよりずっと多いのである。文化のことも、サブカルについても、詳しい。だから、あんなにトイレの綺麗な国から来たんだから、あなたも呆れているでしょう、といたいようだ。私がハリツィナの歴史を学んでいることも知っているので、ポーランド人がルヴフ(リヴィウのポーランド名)に愛着を持っているのも理解できるでしょう、と。

しかし、私からすると、歴史を共有する隣国を訪ねるのに、何故、博物館の解説程度のウクライナ語を読めるようにしてこないのかが分からない。いや、学ばない理由が分かるだけに、腹が立つのである。ポーランド人、特に西ウクライナ人は、ポーランド語学習に熱心だ。言語体系が近く、習得が容易なポーランド語は、最初に、あるいは英語の次に身に着けるにはちょうどいいからだ。ポーランドに出かけるウクライナ人は、程度の差こそあれ、殆ど 100 パーセント、ポーランド語を理解できる。一部の専門家を除き、一般のポーランド人がウクライナ語を学ぼうとしないのは、ウクライナ語を学ばなくてもウクライナ人と交流に困らないからである。ロシア人も同じだ。言語体系が近いのだから、私達がウクライナ語を習うよりずっと楽なはずなのに、学ぼうとしない。それが、もどかしい。

と考えると、気がついた。私は韓国語も中国語も話せない。学ぼうと思ったこともない。韓国にも中国にも、メールを交わす程度の知り合いはあるが、日本で知り合った人とは日本語で話す。ウクライナで知り合った人とはウクライナ語で話す。それ以外の国で知り合った人とは英語で話す。学界で知り合った人とはロシア語で話す。困らない。だが、彼らはもしかしたら、それを不満に思っているのかもしれない。

結局、「理想的な隣人」なんてどの国も持っていない、ということであろうか。そう思えば、いっそ気楽でもある。自分達も、「理想的な隣人」を目指さないですむのだから。

昨年の 4 月、友人のロックバンド「メルトヴィー・ピーヴェニ」のミシコ・バルバラが震災援助のためのチャリティーコンサートを提供してくれた。私自身、まだ何がなんだか分からない思いでテレビの画面に映る惨事を眺めていたときに、何かしよう、と声をかけてくれたのだった。嬉しかったが、チャリティとなると、些かためらいもあった。何しろ、ウクライナと日本では通貨の価値が違う。

コンサート当日、入場無料とあって、会場となったアートカフェ「ズィガ」の 2 階には、文字通り立錫の余地もないほど多くの人々が来てくれたが、殆どが若い男女である。彼らの懐状態を知っているだけに、寄付を頼むのに気が引けた。

案の定、チューニングのときに、誰かがフロアから声をかけた。

「なあ、何で日本人を助けるんだい、ミシコ？ 俺のことも助けてくれよ」

「何で日本人を助けるかって？ それは俺たちが一番日本人の気持ちを理解できるからだ。ウクライナ人と日本人は厄介なお荷物を共有している仲間だからだ。俺たちだけが、何時メルトダウンするか分からない原子炉と、いつ侵攻してくるか分からないロシアっていう厄介な隣人を抱えたつらさを正確に理解できるからだ」。

これで一気に雰囲気はほぐれた。

リヴィウでは、私がかつてお世話になったロータリークラブの方々も震災後すぐに寄付を申し出てくださった。全てをあわせても 20 万ほどだが、それは殆ど若いリヴィウ人の年収に匹敵する額である。大学を出た世代の月収は、日本円で 20000-30000 から、せいぜい 40000-50000 だ。隣人とのつきあいは難しいが、隣人の隣人との付き合いは乙なものだ。お金のありがたさも、自分がどういう隣人かも教えてくれるのだから。我らの隣人に栄えあれ！ 隣人の隣人には更なる栄光を！ スラーヴァ、ウクライニ！

III ネットの上のナショナリズム

—日本の個人主義 Privatism とウクライナの個人主義 Individualism—

斯くも高らかな雄叫び「カッシャイ・ヴィクトル、オレはお前が嫌いだ！」

シェーヴァの感動的な 2 ゴールから 8 日後の 6 月 19 日の深更、そうそう簡単には聞けないと思っていた例の「Slava Ukraini!」「Heroiam Slava!」の続きが我が家の前の通りにこだました。ただし今回、「Slava Natsii!(我らが民族に栄光を!)」の後に続いたのは、「Smert' Voroham!(敵に死を!)」ではなく、「Smert' Viktorovi!(ヴィクトルに死を!)」だった。

ウクライナでヴィクトル、しかも深夜の酔っ払いに死を請われるヴィクトルといえば、真っ先に浮かぶのは大統領のヤヌコヴィッチである。西ウクライナでは特に忌み嫌われている大統領なので、選挙戦の後ならヤヌコヴィッチのことだと思って間違いはないところだが、今回は違った。

ヤヌコヴィッチが敗れた日

カッシャイ・ヴィクトル Kassai Viktor はたった一夜にして大統領ヴィクトル・ヤヌコヴィッチを超えた。ソ連時代の伝説の歌手ヴィクトル・ツォイも超えた。彼は一夜にしてスラブ社会におけるヴィクトルの第一人者になったのだ。

Google 検索上の話である。

ご存知のように、Google を初めとする検索エンジンには予測変換機能がある。「ヴィクトル」というのはウクライナにはよくある名前、一番有名なところでは、オレンジ革命を引き起こした二人の候補、ユーシチェンコとヤヌコヴィッチがともにヴィクトルである。ユーシチェンコの大統領在任中にはヴィクトルと入れれば、最初の候補としてユーシチェンコの名前が挙がっていたが、最近ではヤヌコヴィッチの名前が最初に挙がるようになっていた。それが、6 月 19 日の深夜から 20 日にかけてのどこかで、ヤヌコヴィッチはいともあっさりとトップの座から蹴落とされた。蹴落とされたのが、カッシャイ・ヴィクトル、というわけで、彼は同じ頃、ロシア語検索でヴィクトル・ツォイのことも易々と蹴落としていた。ちなみに、ロシア語とウクライナ語ではヴィクトルの綴りが違う。ロシア語では Виктор、ウクライナ語では Віктор となる。名前が先に来ているのは、カッシャイがハンガリー人だからだ。

一夜にしてウクライナ人のネットアイドルにのし上がったカッシャイ・ヴィクトルは、D グループの最終戦でイギリス対ウクライナ戦の主審を務めたハンガリー人レフェリーである。もう少し詳しく言うと、この試合に決勝リーグ進出の望みをかけていたウクライナチームのマルコ・デヴィッチが放った渾身のシュートをノーゴールと判定した主審だ。

試合はイングランドがウェイン・ルーニーのゴールで先制したが、0-1 で迎えた 61 分、ミレウスキーからパスを受けたデヴィッチがシュート。イングランドの DF ジョン・テリーがゴール前でクリアしようとしたが、ボールはゴールポストの内側にあつた。ように見えた。テレビの画面でも、スロー再生をするまでもなくボールはゴールポストの内側にあるのがみえる。しかし、主審のカッシャイ・ヴィクトルはクリアを宣告。結局、ゲームはイングランドの 1-0 で終わり、ウクライナはグループリーグで敗退、イングランドが D グループ首位で決勝リーグに進んだ。

ちなみに、グループリーグの成績から言うと、仮にこのゴールが決まっていたとしても、1-1 で終了したので

はウクライナはグループリーグを勝ち抜けることは出来なかった。ただ、同時進行のスウェーデン対フランス戦がスウェーデンのペースで進んでいたこともあって、あのゴールが決まっていたら波に乗っていたのに、の思いは捨てきれない。

憤然とするウクライナ人とウクライナメディアの中でひっそりと男をあげたのは、監督のプロヒンだった。シエウチェンコが現れるまでウクライナサッカー史上最強のストライカーただだけに、普段は強持で扱づらいプロヒンだが、こういうときはちゃんとしたスラブの大人である。

「うちの選手達はボールを支配していた」「みんなきちんと動いていた」「イングランドチームより良い仕事をしていたが、運がなかった」「恥じるべきことは何もない」「私は彼らを誇りに思う」といった穏やかな言葉は、落胆した国民に好意的に受け止められた。

しかし、幾ら監督が穏やかに宥めても、ファン達は大人しくしていなかった。ファンというか、ここから先は、フリーガンの話になる。フリーガンならおとなしくないのが当たり前だと思ふかもしれないが、そんなことはない。海外では、日本ではフリーガンでさえ秩序正しい、ということがしばしば話題になる。その点、ウクライナのフリーガンは極めてストレートであった。

彼らが一夜のうちにやったことはこうだ。まず、Facebook の「カッシャイ嫌い Kassai Dislike」のページにウクライナ人が押し寄せた。ちなみに、Facebook には大統領ヤヌコヴィッチのアンチによる「ヤヌコヴィッチ、我らの残念な大統領 Янукович — наш горе-президент/ Yanukovich — our failed President」というページもあるが、こちらのメンバーが 6 月 26 日現在で 67 人なのに対して、「カッシャイ嫌い」のメンバーは同日 33120 人。その殆どが 20 日以降に加入している。後に述べる理由から、初期のメンバーはエストニア人が主だったが、この日加入したのはウクライナ人と彼らのお友達が中心だった。

新規加入者によるメッセージは文字通り、罵詈雑言の嵐。ロシア語、ウクライナ語が主だが、一番多いフレーズはロシア語でもウクライナ語でもなく、英語の「Fuck You!」だ。ページにはフォトショップ加工されたカッシャイの写真好があふれ、それらの写真好は SNS や掲示板を通じて瞬間に伝播した。写真好の多くは「盲目」を揶揄するものである。あんな明らかなゴールを見落とした、つまり、目が見えていない、というわけだ。

例えば、ゴールポストの脇に立つカッシャイの後姿の写真好に盲人用の白い杖と盲導犬を持たせたものがある。政治的正しさなんてどこ吹く風という感じだ。また、宇宙飛行士が上空でボードを示している写真好も人気だ。ボードには「ゴールはあった！我々でさえ見てたぞ！」と書かれている。宇宙空間からさえ見えたものが、いったいどうしてあんなに近くにいた者があれをゴールじゃないなどというのだ、と言いたいのだ。

それでも、Facebook は SNS だから、他にもおかしなページはいやというほどある。モラルの点からみて Facebook の罵詈雑言よりもひどかったのは、Wikipedia ウクライナ語版の改竄である。何しろ、いくら「フリー」とはいえ、ウィキペディアは事典なのだから。

激しい改定をされたのは後半だけで、前半はごく普通の説明だったので、現在でもほぼ同じ形で残っている。それを参考にしながら、カッシャイ・ヴィクトルを紹介してみよう。

カッシャイ・ヴィクトル Kassai Viktor は 1975 年生まれ。審判としては若手で、シエウチェンコと同世代だ。ウクライナ語やロシア語版ではハンガリーのブダペスト生まれとなっているが、英語版やそれを基にしたらしい日本語版ではタタバニャとなっている。本職も、印刷業、観光業と様々だ。

2003 年から FIFA の審判員を務めていて、2008 年の北京五輪や同年の欧州選手権でもジャッジしているが、カッシャイが世間の注目を集め、Facebook に「嫌い」のページが作られるきっかけとなったのは、2011 年 11 月 11 日に行われた UEFA の予選プレーオフでアイルランド対エストニア戦の主審を勤めたときだ。試合は結局 4 対 0 でアイルランドが勝ったのだが、カッシャイはこのときエストニアの 2 選手を退場処分とし、アイルランドにゴール前での PK を与えている。これが「アイルランド鼻唄」の偏向ジャッジの疑惑を呼び、エストニアのサッカーファンに「カッシャイ嫌い」のページを開かせた。

そして今回。「マルコの悲劇」があった夜に改訂された部分はこうだ。

「(カッシャイは)2012 年 6 月 19 日、グループリーグのイングランド対ウクライナ戦でマルコ・デヴィッチのゴールを認めなかった。下種野郎だ。そのおかげで、ウクライナナショナルチームは自国開催の EURO でベス

トイトに進出することが出来なかった。これにより、(カッシャイは)『ロンドンの淫売』という愛称を手に入れることになった。」

下種野郎と訳したのは、ロシア語の негодяй (ロシア読み Nnegadyai/ ウクライナ語読み nehodyai) という単語、ウクライナ語では негідник (nehidnyk) となる。どちらにしろ、誉めるときには決して使えない言葉だ。特に、ロシア語で語尾に-яй とつく言葉は大抵蔑称。女性は使ってはいけないものが殆どなので、うかうかと口にしないように。

ロンドンの淫売のほうは、лондонська шльондра。шльондра も罵り語なので、淫売というより、売女と訳したほうがニュアンスが近いかもしれない。したがって、より言葉の雰囲気と文章の勢いを重視して訳すと、「カッシャイの野郎は 19 日のイングランド対ウクライナ戦でマルコ・デヴィッチのスーパーゴールを認めやがらなかった。下種野郎め！おかげで、ウクライナチームはせっかくの自国開催の EURO でベストイトに進出することが出来なくなった。あの『ロンドンのくそ売女』のせいだ！」といった感じになるかと思う。

作家の米原万里氏が生前よく「ロシア語は罵倒語の宝庫」というようなことを仰っていたが、罵倒語のポキャラリーというのは、喧嘩の場が多いほど増える。ロシア語に罵倒語が多いのは、ロシアの民がやるときには徹底的にやる、言うときには腹藏なんぞかけらもなく言いまくる人々だからだが、ウクライナ語にはそれらのロシア語の罵倒語がそのまま入り込んでいる。罵倒された言葉を人は忘れることなどないのだから。そしてその上に、自分達が普段使う罵倒語もある。更に、かつてオーストリア領でポーランド文化に支配されていた西ウクライナには、ポーランド語由来の罵倒語、ポーランド経由ドイツ語、イディッシュ語由来の罵倒語、ハンガリー由来の罵倒語などもある。ウクライナ語のほうが罵倒語の宝庫と言えるのではないか？

無論、ウィキペディアは翌日にはより落ち着いた論調のものに書き直されていたが、いくつかのメディアが「その夜の作品」を伝えてくれている³。それらの記事によると、ウクライナ語ウィキの改竄に手を染めた者たちは、ご丁寧に英語版のウィキにも遠征し、カッシャイの写真に「London Prostitute」とキャプションを入れたらしい。

ウィキメディア・ウクライナによると、カッシャイのページのウクライナ語版は、6 月 20 日だけで 26829 回の閲覧があったという⁴。

繰り返すが、こういう所業に及んだのは、ごく一部のファンである。女性の多くは騒動の話を聞くと、呆れ、怒った。国際関係研究所でジュニア・フェローをしている友達は、「Facebook にあんなことをするなんて、彼らは Facebook を Vkontakty と同じように思ってるのよ。Facebook はウクライナ人とロシア人だけじゃなくて、世界中の人が使ってるのよ。あんな馬鹿なことするなんて外国人に対して恥ずかしいわ」と顔を顰めていた。

私は、ウクライナのフリーガンは日本のそれとこんなに違う、と言いたいのではない。先日のオーストラリア戦では大した「作品」がでなかった日本でも、オリンピックの参加がなかったアジア大会や、ワールドカップ級の大会で致命的な「誤審」があれば、ゲームが終わるか終わらないかのうちに 2 チャンネルにいくつもスレがたち、フォトショップも出回るだろう。対戦相手が韓国や中国といった歴史的に因縁のある国なら、なおさら盛り上がるだろう。浅田真央選手がキム・ヨナ選手としのぎを削っていたときのネットの喧騒は記憶に新しい。

だが、そのとき、匿名ではなく、個人名や学校名、顔をだしてまで Facebook で審判に悪態をつく日本人がどれくらいいるだろうか？ましてそこで、盲人を茶化するような政治的に正しくないジョークを次から次へ

³ <http://news.tochka.net/ua/121361-vikipediya-rasstrelyala-arbitra-ne-zashchitavshego-gol-ukrainy-foto/>

⁴ <http://wikimediaukraine.wordpress.com/2012/06/21/%D1%81%D1%82%D0%B0%D1%82%D1%82%D1%8E-%D0%BF%D1%80%D0%BE-%D0%B2%D1%96%D0%BA%D1%82%D0%BE%D1%80%D0%B0-%D0%BA%D0%B0%D1%88%D1%88%D0%B0%D1%97-%D0%B2-%D1%83%D0%BA%D1%80%D0%B0%D1%97%D0%BD%D1%81%D1%8C%D0%BA/>

と生み出すことが、骨の髄までアメリカの倫理観に支配されている日本人にできるだろうか？そして、ウィキを改竄しようなんて発想が生まれるだろうか？それも他国にまで遠征して？

そう考えてみるとやはり徹底した匿名性というのは、日本のネット社会の大きな特徴といえる。私は、匿名性を否定するつもりは全くない。それは、「ガイコク」という他者の目と「日本人らしさ」という伝統的な枷から解放されるための唯一の方法であると思う。今後日本でも実名で行動する人は増えてくるはずだが、それでも日本の場合、事が起こったとき一番良く働くのは anonymous majority だと断言できる。日本人は、anonymous であるときだけ、silent majority を脱却できるのである。

この効果的な匿名性を生み出した心因の根幹にあるのは、既に表面的には目に付かなくなっているものの依然として根強いアメリカの影響、あるいはアメリカ的なモラルに対する潜在的な遠慮とでもいうべきものと、フリーガンでさえも他人からの否定的干渉に対して極めて敏感で繊細な「和」の精神であると思う。

アメリカの影響についていえば、表面的には、今現在の日本とウクライナ、どちらがアメリカナイズされているか、どちらがアメリカに親近感、憧れを持っているかといえば、後者である。そもそも、今の日本人は西洋にも西欧にも憧れなど持っていない。日本人がアメリカに憧れを持っていたのは、1980年代までである。世代で言うと、1950年代、昭和30年代生まれ。私が子供の頃、日本テレビ系列で年に一度、「アメリカ横断ウルトラクイズ」というものがあった。最終決戦がニューヨークで行われるため、「ニューヨークに行きたいかー?!」という福留アナウンサーの雄叫びが名物だった。この番組終わったのが、1992年。バブルが収束した頃である。その頃にはもう誰もニュー・ヨークに特別な憧れは持っていなかった。

一方、ウクライナでは今でもアメリカ留学は「花」である。そしてそれは、知らないからこそ「花」である部分が大きいように思える。

友人のマルーシャはリヴィウ大学の英文科に通っている21歳だが、彼女はアメリカ人が大好きだ。2年前にヶ月ほど研修旅行で滞在した際、ウクライナ人と違って「陽気」で「フレンドリー」で「フランク」なアメリカ人に魅せられたのだという。陽気でフレンドリーでフランクな、と彼女が言うのは、散歩中に道ですれ違ったときに、知らない者同士でも「ハロー」と言い合うような性質のことらしい。確かにそういうところはある。そして、昔の日本人がアメリカ人に憧れたのも、それらの性質だったように思う。しかし、知らない人とでも容易に打ち解けて言葉を交わす代わりに、どんなに打ち解けてもプライバシーの内側には容易に人を侵入させず、どこに行っても自分のスタイルに固辞するのもアメリカ人の性質ではないか。少なくとも、日本人である私はそのように理解している。

マルーシャはアメリカ滞在中にホームステイをしていた。ホスト宅では猫を飼っていて、ホストマザーは猫達にキャットフードだけを与えていたという。アメリカでは早期去勢・早期避妊が一般的だから、恐らく全て去勢・避妊済みだったのだろう。猫達はみな恐ろしく太っていたらしい。一方、リヴィウの近郊にあるマルーシャの家でも猫を飼っているが、こちらは昔ながらの放し飼いである。去勢も避妊もしていないので、オス猫は発情の季節が来ると皆放浪に出る。メス猫は家に残り、季節が来ると交尾をして仔を生む。昔ながらの猫のいる風景である。

ホームステイ中、マルーシャはホストマザーが、「○○(猫の名)はおでぶちゃんだわ、ちょっとダイエットしなきゃ」と口にするのを聞いた。そして翌日、スーパーで買い物をしたついでにミルクを買い、家に帰るや、それを猫達に与えた。帰宅して猫達が与えた覚えのないミルクをぴちゃぴちゃなめているのを見たホストマザーは顔色を変えてミルク皿を回収し、マルーシャを呼んで、言った。「マルーシャ、うちでは猫にミルクはあげないのよ。猫はラクトースを消化できないから、ミルクを飲むとお腹を壊してしまうわ」と。

「大丈夫よ。うちではずっと猫達にミルクとスープを上げてるわ。誰もお腹なんか壊さない。みんな元気で健康でスリムで長生きよ」

自分で良いと思ったことを行動に移すことができる。それがウクライナ人の最大の特徴であると思っ
ている。勿論、グローバルイゼーションは物凄い勢いで都市だけではなく田舎にまで浸透しつつあるので、大学を卒業した大人たちは概ね横並びの発想と行動を身につけているものだが、それでも、伝統というの

はそう簡単には死なない。ウクライナでも、人の家庭の子育て、ペット育てに口を出さない人は増えてはいる。が、ちょっとしたすきに、伝統が顔を出すのだ。

私は知らないところを歩くのが大好きなので、しょっちゅう町をぶらついては、しょっちゅう道に迷っている。そういうときはたいていどこかの店に入って道を聞くのだが、殆どの場合、バス停はどこか、といった問いに対して、二つか三つの返答を得ることができる。

ちょっと道が分からなくなったんですが、〇〇通りに出る一番近いバス停はどこですか、と店のおばさんに聞くとする。おばさんが、「それだったら、この道を真っ直ぐ行って右に曲がると良い。10分くらい歩くとバス停があるから、そこからマルシュルートカ(ルートバス)に乗って三つ目の停留所で降りると良い」と言うでしょう。すると、たいてい、店にいた客らしきおじさんかおばさんが口を出して、「いや、距離はちょっと遠いが、左に曲がって一つ手前のバス停から乗った方が良い。道が下りだから5,6分で着く」などという。「いや、あそこは乗降客が少ないから外国人のお嬢さんだと停留所が見つけにくいかもしれない。その次の停留所は三つのマルシュルートカが止まるから誰かが待ってるはずだ。そっちのほうが良い」「いや、このお嬢ちゃんはウクライナ語を話しているから、大丈夫だ。一人でも止められるはずだ」などという二人の討論を聞いた後、適当にまとめて、どうもありがとう、と言って外に出る。

と、途中から話を聞いていたらしい別の客が追いかけてきて、「ねえ、あなた、〇〇通りへ行くの？ だったらバスなんか乗ることないわ。あそこの小道を歩いていたら15分くらいで〇〇通りの裏側に出るわ。バスなんか待つのは無駄よ」などと教えてくれるのだ。昔の話ではない。今の話である。年配の人ではなく、追いかけてきてくれるのは大抵若い、高校生くらいの女の子だ。

私は関西人なので、一般レベルに比して特に冷たい方ではないと思うのだが、それでも、通りすがりの人の5分や10分のために後を追って自分から声をかけてあげられるだろうか、と考えると、Noと答えざるを得ない。あのフットワーク、反射神経はすごいと思う次第だ。

傍若無人な立て看板

さて、時間がたってもウクライナ人の怒りは収まることはないようで、マルコ・デヴィッチの悲劇が起こった19日からおよそ一週間後、イングランド戦のあったドネツクに、いわゆる立て看板が現れた。言うまでもなくカッシュアイだ。そして当然のように、目には盲人用の黒いめがねが落書きされている。「行くぜ」というカッシュアイのセリフに並んで落書き用のスペースが設けられ、「奴について思っていることを書いてくれ」と記されている⁵。ネット上の掲示板と違って、書くからには立ち止まって、ペンを持って、堂々と書くのである。

ネット上と同じように、「メガネ買いやがれ」といった罵詈雑言が並んでいるのを見てみると、ウクライナのフーリガンはアメリカの倫理からも、上品ぶったプチブル嗜好からも、自由なんだなあ、と思える。それは大人たちやちゃんとしたインテリ女性からは眉を顰められるものなのだろうが、何故か少し羨ましい感じもする。恐らく、この国の持つバイタリティのようなものをそこに感じるからだろう。日本が失ってしまった、アメリカも古いヨーロッパももはや持っていない怖いもの知らずの若さのようなもの。アメリカや日本の私生活遵守の個人主義(Privatism)とは違う野生的な個人主義(Individualism)。失点をしないように自分を守る個人主義ではなく、個々がボールを奪い、支配し、シュートを打ち込もうとすることで自分を主張する個人主義。顔を出し、声を出し、名前を告げて、自分のできることをし、自分の意見を述べることに喜びを見出す個人主義だ。

次々と感情を丸出しにして「カッシュアイ・ヴィクトル、オレはお前が嫌いだ！」と宣言するウクライナ人を見ていて思い出したのが、浅田選手とキム・ヨナ選手がオリンピックで戦ったときのことだった。あの時、とても印象的だったのが、時を追うにつれ、キム・ヨナ選手に対するアンチコメントの中に、「日本人はみんなあな

⁵ <http://life.comments.ua/2012/06/25/346324/Donetski-poyavilis-plakati-so.html>

たが嫌いです」といった、主語を「日本人」とするものが目立っていったことだった。

更に時を追うと、今度は「世界中があなたを嫌いです」といった論調に転換していった。これは、ロシアのプルシェンコらがヨナの得点に疑問を呈したからだが、そのこと自体は私にとって別にどちらでも良い。スポーツフィギュアとアートフィギュアの衝突は今に始まったことではないからだ。興味深かったのは、コメントの中で、自分は彼女が嫌いだ、というものが、世界は彼女を評価していない、という論調に、あっという間に転がっていき、「自分」がどこにもいなくなってしまうことだった。

それは、日本人が世界の評価をいかに気にしているかの反映のような気がする。そして、その姿勢、「既に全体的な話題に移っているときに、『自分』の気持ちを告げて良いのだろうか？」と、こっそり周りを見回すその姿勢が、オシムのいう、いざという時にリスクを冒してトライするための、最初の第一歩を遅らせているような気がしたのだった。

V 祭は終わる 革命は続く

昨年、友人でウクライナ語の個人レッスンの先生でもあるオクサーナが紹介してくれたリスニング用の上級教材がとても面白かった。

オクサーナの同僚の若いフェローが書いたもので、ストーリーはマルクというウクライナ語を学ぶドイツ人学生がヒッチハイクしながらウクライナを旅行する、というオーソドックスなものだ。ただ、彼が見るもの、聞くもの、出会う人々の描写がことごとく実際に私達外国人がこの土地を旅行するとき目にし、耳にし、触れ合う人々のそれなので、毎回、ああ、こんなおばさんいる、ああ、こういう間違いあるある、と主人公に同調しながら、それらの背後にある事情、真相を垣間見るのが楽しく、レッスンを終わってからも幾度か読み返した。

私が一番好きだったのは、主人公のマルクがキエフから東に向かう3等寝台車の中で耳にする同室者達の会話というか、口論のシーンだ。相乗り客は20代のカップルと、4,50代らしき太った中年男。そのうち、カップルの片割れの若い男と中年男が口論を始める。耳を澄まして聞いていると、どうやら諍いのもとオレンジ革命であるらしい。冷房の効きが悪いせいか、中年男は若者達が狂騒したオレンジ革命、オレンジ色のお祭り革命の「収穫」についてねちねちと責め立てているのだ。

なあ、お前さん、お前さんたち若いもんがキエフのマイダン(オレンジ革命の舞台となった独立広場のこと)で大騒ぎをして、派手にお祭りをぶちあげて、その後一体何が残ったんだい？世界中の耳目を集め、ガスの女王様を自由の女神に仕立て上げ、ダイオキシンの美貌を失った悲劇のヒーローを大統領に祭り上げて、奴らが結局何を我々にしてくれたんだい？という具合だ。

私はこれと全く同じようなセリフをすでに中年を過ぎたタクシードライバーの口から聞いたことがある。今はドライバーをしているとはいえ、元は国立デパートのディレクターだったという上品な男性で、普段はこの上なく穏やかな人物だが、政治運動の話になるとかすかながら人が変わる。必要なのは政治運動ではなく、政治なのだ、と彼は言う。60歳を目前にしている彼は、実のない政治ごっこを繰り返す自国の伝統にうんざりしているのだった。

このタクシードライバーとは長い付き合いであるだけに、彼の悲痛な問いに一体どんな風に答えれば良いのかといつも思っていた。だから、とても関心を持ってオクサーナの読むテキストに耳を澄ましたのだが、その答えを聞いた瞬間、不覚にも涙ぐみそうになった。

オレンジ革命の「収穫」については、ここ数年、色んな方面で散々まとめられてきたが、私はこのテキストでかつてマイダンにたった一人の青年が述べる「革命の収穫」に対する答が気に入っている。ウクライナの貧弱な政治史の中であの革命は少なくとも民主政治と民主選挙の発展に重大な一歩を記した、といったきれいごとのまとめよりも、ずっと納得できたのである。

「で、一体何が変わったんだ？君らがあそこに立っていた時から何が？」

中年男が言った。静かで、いっそどこか優しげな調子だった。「君は分かっているだろう？そっちにしろ、こっちにしろ、同じ穴の貉だ。奴らは自分達のことしか考えてない。こっちには後足で砂をひっかけるだけだ」

「ああ、分かっているよ、何もかも。あの時だって俺達は分かってたよ。けど、あんただって分かるだろう？あの時は候補者のため、政治家のためにあそこに立ってたんじゃないんだ、ただ……。あの時は、立たないではいられなかった。ただ単に、俺達はそういう人間だからだよ。後から自分の子供達の目をしっかり見られるように……」

長い沈黙の帳。

「おい、どうした？君らは見られるんだな？」

中年男は真面目そのものの口調で尋ねた。

「ん？ああ、俺にはまだ子供はいないよ」

若い男は人の良さそうな声で笑った。「けど、いつか・・・、そうだな、いつか彼らのマイダン、彼らの革命が起こったとき・・・、分かるだろ？それぞれの人生にそれぞれのマイダンがあるんだよ。そのとき、俺は彼らのことを理解できるんだよ。俺はそう思うんだ」

「革命」に参加した、当時学生だった世代に話を聞くうちに、私もそんな風に思うようになっていた。「オレンジ革命」は、とても美しい革命だった。当時よく言われたように、その数年前に起こったグルジアのバラ革命と比べても、乱暴狼藉のない秩序だった革命として記憶されている。その秩序だった美しさは、海外で賞賛された地震直後の日本の美しさどこか似たものを持ちながら、全く別の理由から生まれていた。日本のそれが、他者の目を意識してのものだとすれば、ウクライナのそれは、他者に見せる自分を意識してのもの。彼らは、みんなが行くから行ったのではなく、自分は他の誰かよりもその場を作れる、マイダンで正しく振舞える、と思ったから行ったのである。

マイダンとは広場のことだが、それは本来パフォーマンスを披露する場所。テキストの中の若い男が言うように、ウクライナ人はそれぞれの人生にそれぞれのマイダン、つまりパフォーマンスの場を持っている。場を持っているのにパフォーマンスをしないのは、能力がないといっているのと同じ、恥ずかしいことなのだ。

彼らが将来の子供達に対してもつ信頼感、つまり、自分の子供達もきっと彼ら自身のマイダン、すなわち何らかの舞台をもつだろう、という確信、そして、彼らと正々堂々と対峙するために自分も自分の信じるやり方を示さなければ、という原始的な自己顕示は、私達にはないものだ。西欧人が歓待したのも、「ヨーロッパ人」の原型のようなその自己顕示である。

一方、私達にあるのは、先祖に恥じないように振る舞い、子孫の平和を守るように行動しなければ、という意識である。マイダンの秩序がそれぞれの自律、自意識、自己顕示欲によって保たれていたのに対し、日本のそれを保たせているのは他律、自己抑制、自制心であるということだ。地震後に西への避難を呼びかけた人々が、住人の幾人か、特に幼い子供のいる母親などから、避難したい、だが、家族親族を置いて自分だけ逃げるわけにはいかない、という苦渋の選択を告げられたことを伝えている。日本に住むガイコクジンたちがよく言うように、和を乱すことに対する罪悪感こそ、日本人がもっとも苦とするものだ。

どちらが良い、悪いというわけではない。テキストの中の中年男が言うように、自分の力で良くしたい、というマイダンの若者達の自己顕示欲は、政治家によって容易に利用されてきた。ただ私は、彼らの祭の作法が好きだ。不便だし、実用的でもないが、その祭の作法に魅せられて、いまだにこの地に留まっている。逆に日本には、日本人の持つ、西洋には見られない強力な他律心に惹かれて日本に滞在している外国人がいるのだと思う。異国で悪戦苦闘している身としては、そういう「仲間」にエール贈りたいものだ。彼らに栄光を！我らに栄えあれ！スラーヴァ、ウクライーニ！

附；シェフチェンコとシェウチェンコ

本稿を通して Шевченко/ Shevchenko をシェウチェンコと日本語表記してきたが、これはあくまでも「現代」の「アカデミック」なウクライナ語表記の法則にのっとったもので、東であれ西であれ、シエーヴァを「シェウチェンコ」と呼ぶ人は、稀である。清音の前で b/v が清音化し φ/f となるのはロシア語のルールで、ウクライナ語ではヴのまま、あるいはウとなるのだが、それはあくまでもルールで、シェウチェンコのように全ウクライナから支持されているヒーローの名を、あえて耳慣れない音で呼ぶ必要はないからだ。

シェウチェンコ自身、ウクライナ語は殆ど話せない。次男の誕生したのがオレンジ革命の年ということもあって、子供達にはウクライナ語を学ばせたい、自分も学びたい、と述べているが、彼や彼の息子達がウクライナ語のネイティブになることはまずないだろう。チェルシーでの生活と夫人がアメリカ人であることから、英語が第一言語になっているのではないか。次がイタリア語とロシア語で、ウクライナ語は知識程度だろう。

だが、仮にそうだとすると、それがシエウチエンコの英雄としての価値を損なうことは、全くない。彼はそういった狭隘なナショナリズムを象徴する英雄ではないからだ。彼が象徴しているのは、土地に縛り付けられた一国ナショナリズムではなく、より包括的なリベラル・ナショナリズムである。だから彼は、前者の代表であるバンデラが国家を分断するのは対照的に、その存在で国家を統一できるのだ。

シェーヴァと同じ姓を持つ 19 世紀の大詩人でウクライナ語に魂を吹き込んだ国民的詩人のタラス・シエウチエンコも、彼とともに秘密結社「キリル・メフォディウス結社」の代表的人物だった愛国的な歴史家ムイコラ・コストマーロウ(ロシア語名ニコライ・コストマーロフ)も、厳密な意味ではウクライナ語話者ではなかった。ウクライナ語愛好家で、ウクライナ語擁護家で、ウクライナ語の確立に寄与した人々ではあるが、狭義の言語ナショナリストではない。シエウチエンコもコストマーロウも、ウクライナ人の中にこそウクライナがあると説いたのである。

現在、選挙前とあって、街中には「われらを統一するのは言語だ」と言った標語が目立つが、本来、陽気で社交的で、言語習得能力の高いウクライナ人に狭隘な言語ナショナリズムは馴染まない。シエウチエンコと呼ぼうと、シエフチエンコと呼ぼうとシェーヴァはシェーヴァである。Viva Sheva!!!